

E-13 家庭生活における高齢者の孤独意識 (第2報)  
徳島大教育 遠藤マツエ

目的 高齢者人口の増加は今日、様々な社会問題を提起している。この問題の解決には老人福祉法の制定以来、社会制度的な諸施策が推進されてきているが、その際、高齢者側の心的側面を十分に理解してかかる必要がある。すでにこの問題を事例研究によって検討したので、本報ではこの結果をもとに質問紙調査を行った。2・3の結果を得たので報告する。

方法 ここでいう高齢者とは施設に入居可能な満60才以上とした。しかし、身体不自由者は調査対象から除いている。まず、高齢者の孤独意識の一般状況を知るために、徳島市内に在住している在宅者と施設入居者を対象に質問紙調査を行った。

結果 ①5段階評定尺度を用いて日常生活における孤独意識を測定した。②孤独意識の現われ方は在宅者と施設入居者によって可成りの差がみられた。③孤独意識に影響する要因を分析したところ、親しい者との離別、死別あるいは退院などの人間関係の急激な変化によるところが大である。④対人間関係に伴う行動意欲に関して、会話、外出、交際、仕事および金銭への欲求の程度と孤独意識との関連性を求めた。